プラウトゥス『プセウドルス』の策略と芝居

高橋宏幸

I

プラウトゥスの喜劇『プセウドルス』は奴隷プセウドルスが若者カリドルスのために彼の恋する遊女ポエニキウムを手に入れる策略を軸として劇が展開する．置屋バリオはポエニキウムをマケドニアの軍人に20ミナで売ってしまっている．ただ，15ミナの内金を払い，残金5ミナと印章を持参した使いが彼女を連れ去る手はずなので，その前に20ミナを工面できれば彼女を助けられる．カリドルスの父親シモは自分から金をくすねようというプセウドルスの魂胆に気づいている．それでもプセウドルスはシモの面前で，彼からその金をもらう，その前にまずポエニキウムをバリオから奪い取る，と宣言する．そして，もし自分がポエニキウムの奪取に成功した場合は彼女の身請け金をシモからもらうという約束を取りつけ，この約束の証人をシモの友人であるカリポに頼む．プセウドルスは軍人の使いハルパクスから印章を手に入れ，カリドルスの友人カリヌスから5ミナを借りる．この印章と金をもって，ハルパクスの替え玉に仕立てられた奴隷シミアがまんまとバリオからポエニキウムを奪い取る．プセウドルス，シミア，ポエニキウムの三人は勝利の宴に向かう．一方，バリオはポエニキウムをシミアに渡したあと，もう大丈夫と安心し，シモに，もしプセウドルスがポエニキウムを自分から奪うことがあれば約束の20ミナは自分がシモに払い，娘もおまけにやる，と約束する．そこへ本物のハルパクスが現れ，ポエニキウムを要求する．バリオとシモはこれがプセウドルスの回し者と勘違いしてからかおうとする．が，ようやく誤解が解けたとき，バリオはポエニキウムを奪われた上，ハルパクスに15ミナを返金し，シモに20ミナを払わねばならない大損害を蒙る．

以上が第四幕までのあらすじで，プセウドルスが自分の宣言したとおりに見事な成功をおさめ，バリオが手ひどくやっつけられる痛快な筋立てと言える．終幕となる第五幕はプセウドルスとシモの対決となり，それを通じて劇中に現れた筋がすべて完結する展開となろうことは誰しも予想するところと思われる．少なくとも，ギリシアの原作との関係も考慮しつつ筋の一貫性・整合性を

重要視する学者たちはそうした，いはば，そう「あるべき結末」を推測してきた．そうした推測の代表例を次に記してみる．

まず，金を払う側と請求する側で交渉が行われる．プセウドルスが約束に従ってシモに支払いを求める．が，シモは強欲に応じない．そこで，プセウドルスは約束の証人であるカリポを仲裁役として呼んだであろう，とウィリアムズは推定した[1]．そこへさらに，ポエニキウムの身請け金を求めてバリオがやってくる（ポエニキウムを策略で奪い取るだけでは，それは窃盗であって，カリドルスが彼女を正当に自分のものとするには身請け金を払わねばならない．これは喜劇の舞台上でも遵守されるべき法である）．カリポを仲裁・審判とした三者が交渉する．その過程で，バリオとシモのあいだの約束も露呈する．その結果，シモは20ミナを払わずにはすまなくなる．

次に，その金が三者をめぐってすべてが丸くおさまる．というのは，受け取った20ミナのうちからプセウドルスは5ミナをカリヌスに返し，15ミナをポエニキウムの身請け金としてバリオに支払う．バリオはこの15ミナとシミアから受け取っていた5ミナの計20ミナをシモに渡して約束を履行する．従って，金に関しては誰にも損得がない．ポエニキウムを売る儲けがバリオから消えただけとなる．これがルフェーブルの提起した「金の循環」説[2]である．

以上のような筋を辿れば実によく整った結末を迎えたと思われるが，第五幕の実際の展開はそうならなかった．それは第四幕末でのシモの次のような独白に予示される：

> さあ，わしは決めたぞ．ひと味違うやり方でプセウドルスに不意打ちを食わせてやるんだ．他の喜劇だったら，突き棒や鞭を持って不意打ちするところだが，わしはこれから中に入って二十ミナを取り出してくる．あいつがうまくやったら，やると約束してあった金だ．これをあいつに会ったら，こっちから渡してやる．舌を巻くよ，あの男の賢さ，機転，悪さには．トロイア陥落の策略とウリクセスもプセウドルスにはかなわない．さあ，中へ入って，金を取ってこよう．プセウドルスに不意打ちを食わすんだ．　(1239-45)

このあと，第五幕が開くと，第一場，プセウドルスが千鳥足で登場して宴会の様子を語り，続いて，約束の金を取り立てようとシモを呼び出す．第二場，シモは約束の金を自分から用意し，プセウドルスが求めると，これをすぐに渡す．この金の受け渡しの前後にプセウドルスからシモは，酒臭いげっぷを吐きかけられ，「負けたが運の尽き」という侮辱の言葉を投げつけられる．そうし

た愚弄を受けながら，シモは渡した金の一部を返すように哀願したり脅したりする．そのいずれもプセウドルスははねつける．シモが怒って立ち去ろうとすると，プセウドルスが引き留め，一緒に宴会に行くなら金の半分かそれ以上を返す，と誘う．シモが同意して幕となる．

上に見た「あるべき結末」と比べて，この結末の特色は，登場人物の点でバリオとカリポの出番がないこと，これを筋の面から言えば，プセウドルス，シモ，バリオの三者による交渉の場が失われ，「金の循環」が消えていること，そして，プセウドルスがシモに返金を約束すること，これらに認められる．

ただ，このうち，バリオが登場しないことは第四幕での展開からの必然だと言える．というのは，第四幕でのシモとの約束でバリオは，ポエニキウムも贈り物にする，と言ってしまったので，身請け金を請求できなくなっている．従って，第五幕に彼の出番はない．これによって，「金の循環」という整った筋を崩す代わりに，バリオに一方的に損をかぶらせる結末は，ゲルラーも言うように[3]，対比的にプセウドルスの成功を際立たせる劇的効果を意図したものと理解される．

それに対して，カリポが登場しないことは明らかに筋の不整合である．第一幕第五場でプセウドルスは，シモと約束を交わした際，とくに頼んでカリポに証人を引き受けさせている(547-50, 559-60)．にもかかわらず，そうした仲裁役の出番は第五幕になく，この筋は宙に浮いた形となり，学者の議論の的とされてきた[4]．ここでその議論の詳細には立ち入らないが，引用した第四幕末のシモの科白との関連で注意したいのは，仲裁役が不要となったのはどうしてか，という点である．というのも，第五幕でプセウドルスがカリポを呼ばなかったのは，彼の請求に対して，すぐにシモが金を渡したからである．この時点で約束が果たされたために仲裁役の必要は消えた．つまり，カリポの出番が失われたのは，シモが自分から金を渡したことに起因している．

同様のことは，カリポの筋だけでなく，プセウドルスの返金の約束についても指摘できる．この返金については，上に見た「金の循環」と関連して，どうしてプセウドルスはそうした約束ができるのか，ということが問題とされてきた[5]．というのも，シモとバリオの約束によって身請け金が不要となったことをプセウドルスは知らない．従って，彼がシモから金を取り立てるとき，それをバリオに払うつもりでいるはず[6]だからである．この問題への即答は困難である[7]が，プセウドルスが返金を約束できるためには，その前にシモがプセウドルスに金を渡していなければならないということははっきりしてい

る．たとえば，シモが金を渡す前に，半分にしろ，とでも値切って，プセウドルスがこれに同意したとしても差し引きの結果は同じになる．この交渉はカリポを呼び出すことにもなったであろうし，これを通じて二人の仲直りも成立しえたと想像される．シモは自分から金を渡したために哀願や脅しで返金を求めることになり，結局，プセウドルスから約束を取りつけることとなっている．

このように，第五幕に認められる二つの筋の不整合については，いずれもシモが自分から金を渡したことに起因していることが認められる．ところが，この行為をシモは第四幕末の科白の中で予告していた．しかも，それを「他の喜劇とはひと味違うやり方」(alio pacto quam in aliis comoediis fit 1239f.)によるプセウドルスへの策略として繰り返し強調している．このことは，第一に，上に見た「あるべき結末」と第五幕の実際の展開との関係，第二に，劇全編の特色として指摘される「芝居」のモチーフないしメタファーという観点から興味深いものに思われる．

学者の推測した「あるべき結末」は，他の人間も予測しうる筋書きという点で，「他の喜劇」の典型とも考えられるであろう．ところが，第五幕の実際の展開はそれとは違っており，その相違の原因が「他の喜劇とはひと味違うやり方」とシモ自身の言う自分から金を渡す行為に認められた．とすると，筋の不整合を含む第五幕の展開は第四幕末のシモの予告に示されるとおりのものとして，プラウトゥスによるなんらかの劇作意図に基づくのではないか，という推論が立てられるように思われる．

この第一の観点からの推論は第二の観点によって補強できる．ライトは劇中に用いられる豊富で多様なイメージやメタファーを指摘したが，これを踏まえつつスレイターはとくに「芝居」に着目した[8]．スレイターは『プセウドルス』の主題はプラウトゥスが上演する劇そのものとまで考え[9]，それは一定の説得力を有していると思われる．その「芝居」の文脈の上で，とくに次のプセウドルスが観客に向かって言う科白にはシモの第四幕末の科白との対応関係が認められる：

どうも怪しいな．あんたがた怪しいと思ってるな，俺がこんな大それたことを約束するっていうのは，あんたがたを喜ばして，この芝居をとにかく最後まで行き着かせようという魂胆で，実はやると言ったことをやらないんじゃないかってね．でも俺に二言はない．それに，これも確かで，よく分かってることだが，そいつをどういうふうにやるか，それがひとつもまだ分かってない．でも，やるってことは確かだ．だって，舞台に登場する人間はいままでにないやり方でいままでにない工夫

をもってこなくちゃならん．それができないんなら，できる人間に出番を譲るべきだ．(562-570)

シモの場合と同様，このプセウドルスの科白も第一幕末という劇の転回点に置かれ，次幕以降に演じられる策略について提示している．なによりも，その策略を芝居にたとえつつ，そこに「いままでにないやり方，いままでにない工夫」(novo modo novom aliquid inventum 569)が必要，と言っている点が顕著な共通点である．とすると，第四幕末のシモの科白が行う予告は，劇全編の流れと関連しつつ，第五幕の展開に重要な意義をもつものと予想される．

以上の着眼から，本稿は第五幕に認められる筋の不整合，カリポの筋の消失とプセウドルスによる返金の約束について，劇中の「芝居」の文脈に照らして再考しようとする試みである．

II

第一幕第三場でバリオとの交渉が失敗したあと，プセウドルスはカリドルスに金策を約束するが，具体策はできていない．そんな自分の状況を彼は第四場の独白で劇作家にたとえる(10)：

これからどうするんだ，若旦那に気前よく豪勢な口約束をしてしまって．そんな約束を果たせる保証がどこにあるんだ．俺には雀の涙ほどもないんだ，これって頼りになる考えだって金だって．いまどうすればいいかも分からない．織り始めをまずどこから取りかかるかの見当もつかなければ，織り終えた布の上げどころも決まっていない．作家というものは，ノートを手に取ると，さがしてもこの世のどこにもないものでも，いつもきまって見つけ出し，嘘のことを本当らしく見せる．そんなふうに俺もいま作家になろう．二十ミナの金はいまこの世のどこにもないが，俺は見つけてやる．(395-405)

この科白では「芝居」，ないし，その上演が「無から何かを生み出すこと」と捉えられている．これが先に引用した「舞台に登場する人間はいままでにないやり方でいままでにない工夫をもってこなくちゃならん．それができないんなら，できる人間に出番を譲るべきだ」という科白と同じ意図に基づいた提示を行っていることは明らかであろう．プセウドルスとシモの約束が交わされ，カリポがその証人役を保証する第一幕第五場はこれら二つのプセウドルスの独

白が枠をなし，劇中にも「芝居」の文脈がもっとも明瞭に現れる場面である．

プセウドルスが提案した約束に対しシモがまだ疑念を抱いているとき，バリオとの裏取り引きがあれば自分は仕置きを受ける，とプセウドルスは宣言し，それがシモに決断させる．このとき，鞭打ちは葦ペンに，プセウドルスの策略が芝居にたとえられる：

プセ　もし私たちが示し合わせているとか，画策に走ったことがあるとか，あるいは，この件で一緒に集まったことがあるなら，ちょうど本の上に葦のペンで字を書くときのように楡の木のペンの跡を私の体いっぱいに刻み込んでください．
シモ　さあ幕開きの合図をしろ(indice ludos)．いつでもいいぞ．　(543-6)

プセウドルスがカリポに証人役を頼むと，「楽しみだよ、おまえの芝居を見物するのは、プセウドルスよ」(lubidost ludos tuos spectare, Pseudole 552)と言ってカリポは承知する．プセウドルスの「私の計略に出番を譲ってください」(meis vicissim date locum fallaciis 558)という科白によりシモとカリポの二人が退場する[11]．

このあとにくるプセウドルスの独白とも合わせて，ここでは，第二幕以降に演じられる策略がこれから始まるプセウドルスの芝居として提示されている．第一幕第五場の展開はその舞台作りと見なせるであろう．シモとプセウドルスの約束は，第四場の独白のたとえで言えば，真っ白なノートに大まかな構想が書き込まれたところである．

この構想の実現をカリポは「まったく神業だ，本当にこいつが言ったとおりのことをしたら」(519)と驚き，シモは「もし本当にそんな芸当を，おまえが宣言したとおりにやり遂げたら，おまえの武勇はアガトクレス王にも勝るだろう」(531-2)と賛嘆に値することを述べる[12]．このようにカリポとシモはプセウドルスの策略が実行不可能だと考えている．カリポが田舎に行く予定を取りやめて証人役を引き受けた(549-51)のも，その不可能事の見物が楽しみだからであり，シモが約束に同意したのも，それが実現して自分の損になることはないと思ったからかも知れない[13]．それはともかく，ここで第五幕のシモが自分から金を渡す筋との関連で注意したいのは，シモとカリポがプセウドルスの策略を実行不能と考えたのはなぜか，という点である．

それは，次のやりとりがはっきり示すように，二人がプセウドルスの企みを知っているからである：

シモ　それでおまえたちどうするつもりだ．もうこのわしからは金を取れんぞ．なんといってもわしに分かってしまったんだからな．誰ひとり一銭たりとも貸さんように，みんなに通知を出してやる．

プセ　誓って言いますが，誰にも泣きつきはしませんよ，あなたが生きておいでの限りはね．必ずあなたがお金をくれますよ．あなたからです，私がもらうのは．

シモ　おまえがわしからもらうだと．

プセ　がっちりです．

シモ　誓って言うが，わしの目をくり貫いてかまわんぞ，わしが金をやるようなことがあればな．

プセ　くれますって．お忘れなく，私にくれぐれもご用心を．

カリポ　これだけは確かだな、もしおまえが金を取れたら、前代未聞の大それたことをやってみせるってことだ．

プセ　やってみせますよ．

シモ　もし金を取れなかったらどうする．

プセ　お仕置き棒で打ちのめしてください．でも，どうします，金が取れたら．

シモ　ユッピテルにかけて約束する、おまえは一生おとがめなしだ．

プセ　その言葉を忘れないでくださいよ．

シモ　このわしが前もって言われていながら用心のできん人間だというのか．

プセ　前もって言っときます．ご用心を．言っときますよ．いいですか．ご用心，ご用心ですよ．　(504-17)

ところが，シモとカリポがプセウドルスの企みを知ったのは，プセウドルス自身が白状したためである．シモに尋ねられると，プセウドルスはシモから金をくすねる算段からカリドルスの色恋をシモに黙っていた理由まであっさりしゃべってしまう(479-503)．これらのことをシモは最初から町の噂などで感づいていたが，この白状がそれを確証し，シモの警戒を完全に固めさせている．それが白状した狙いであったかのようなプセウドルスの口ぶりでもある[14]．つまり，プセウドルスは，見方によってはほとんどやけ気味に，自分にとって絶対的に不利，相手にとって有利と思われる状況にまず自らを追い込み，そのあとでシモから約束を取りつけている．

ここで気づくのは，この手順ないし経過が第五幕でシモが自分から金をプセウドルスに渡し，そのあとで返金の約束をされるのと対応しているように見えることである．シモの企みが金を渡さずにおくことにあるとすれば，自分から金を渡すことはまさに自暴自棄であり，自分の企みをきわめて実現困難の状態

に追い込む行為と言える.

この対応について注目される点が二つある. 一つは, 「他の喜劇とはひと味違うやり方」という第四幕末でのシモの科白, および, 「いままでにないやり方でのいままでにない工夫」という第一幕末でのプセウドルスの科白との関連である. シモが自分から金を渡す行為もプセウドルスの白状もそれぞれの企みと正反対の方向に向かう行為で, その意味で, 普通ではないやり方である.

二つ目は第一幕第四場のプセウドルスの独白との関連である. そこでは, 芝居が「無から何かを生み出す」と言われたが, プセウドルスもシモも自分の有利さを放棄し, いはば, ご破算から事を起こしている点で, 「無」の状態に自分を追い込んだと見なしうる.

こうした対応からは, 第一幕の提示が第二幕以降にプセウドルスの策略が「芝居」として展開することを予示するように, 第四幕末での自分から金を渡す行為をシモの策略とする提示によって, このシモの策略が「芝居」として第五幕の展開の中心をなすことが暗示されているように推測される. とすると, 結果的に, シモはプセウドルスから返金を約束されたのであるから, シモの企みは成功をおさめたと考えられる. ただ, そうだとすると, プセウドルスにしてみれば, まんまと一杯喰わされたことになる. これは大活躍を見せた主人公が最後に失敗して幕を閉じるというアンチクライマクスの結末ということになってしまう. しかし, そもそも, 『プセウドルス』は本当にプセウドルスの活躍ばかりを見せ場とする劇なのだろうか.

III

プラウトゥスの喜劇の特色の一つに奴隷たちの活躍, その劇中に占める役割の重要性がよく指摘される(15). 彼らは機転が利き, 悪巧みに富み, 自信満々で, 主人の仕置きを恐れない. 煮ても焼いても食えないが, 舞台上を走り回るのを見るのはこのうえなく楽しい連中である. プセウドルスはそうした奴隷の代表と見なされる. プセウドルスの主人公としての存分の活躍ぶりに疑問を呈する議論はまず見あたらない.

しかし, プセウドルスは劇中で明らかな不手際も演じている. それは第四幕でのシミアとの対比にはっきりと示される.

シミアがハルパクスに化けてバリオをだまし, 見事にポエニキウムを奪い取る策略が演じられる第四幕の場面は劇一番の見せ場と思われる. この場面で,

シミアと対照的にプセウドルスは実に小心でぎこちない．それは第一場，プセウドルスのあとからシミアがゆったり，堂々と登場するところから現れる：

プセ　（振り返って）だが，あいつはどこだ．俺の馬鹿さかげんはどうだ，こんなことを俺ひとりだけでしゃべっているなんて．あいつ，俺をだましたに違いないぞ．悪同士のあいだで俺の用心に間が抜けてたんだ．なら，俺はまったくおしまいだよ，あの男がいなくなったんだから．今日やり遂げたかった仕事もできやしない．だが，ほら，あそこに来たよ．殴られるのが板についた奴だ．歩く姿も華々しい登場だ．おいおい，おまえのことをさがしてたんだぞ．ずいぶんひどく心配してしまったよ，おまえがずらかったんじゃないかってな．　(908-12)

シミアの自信と落ち着きに比べて，プセウドルスの焦りと不安が目立つ：

プセ　だがさっそくこの，俺たちが取りかかった仕事をやってもらいたいんだ．
シミア　他のことを俺がしてるように見えるかい．
プセ　それなら，さっさと歩いてくれ．
シミア　いや，のんびりのほうがいいな．
プセ　いまが狙い目なんだ．あいつが眠ってるあいだに，おまえが先手を打って，ものにしてもらいたいんだ．
シミア　何を急いでるんだ．落ち着けよ．心配ない．ユッピテルの力で，そいつが同じ場所に姿を現すことにならないかと思うくらいさ，軍人のところから来たそいつが誰であろうとな．誓ってもいいが，絶対にそいつには無理だよ，俺より立派なハルパクスになろうったって．だから安心してくれ．この件は俺がきれいに片づけてやるよ．俺があいつを策略と嘘八百で震え上がらせて，軍人からの使いというのは実は自分がそういう者なんじゃなくて，俺が本当はそういう者なんだ，と認めさせてやるさ．
プセ　どうやるんだ．
シミア　じれったくて死にそうだよ，まだそんなことを聞くのか．　(918-31)

そんなプセウドルスは，第二幕末の手はずでシミアに芝居の策を仕込むはずだった(764-5)のに，シミアから余計な講釈は無用と言われてしまう：

シミア　注意がいるのはあんたのほうだ．それが俺に注意することはない．
プセ　ずいぶんとまあ，俺のことを馬鹿にしてくれるな．
シミア　俺があんたを馬鹿にしないわけにいかないだろう，俺は軍人らしい軍人に見えなけりゃならんのだ．　(915-8)

シミア　あんたにだって策略と嘘八百では上を行ってみせるぜ．あんたは俺の先生のつもりでも，見てれば分かる．　(932-3)

シミア　黙っててくれないかな．頭に入ってることも抜けてしまうんだよ，頭に入れて覚えてることを思い出させようとする奴がいるとさ．俺は掌握してるんだ．すべて胸におさめてあるし，策略にも知恵を絞ったよ．

・・・

プセ　でも，どじを踏まないでくれよ．

シミア　黙っててくれないかな．　(940-2)

この二人の対照は，続く第二場に引き継がれ，とくに，策略のハイライト，バリオが軍人の名をシミアに尋ねた場面にはっきりと現れる：

シミア　この手紙を受け取ってくれ．これをあんたに渡せって言われたんだ．

バリオ　誰なんだ，そう言いつけたのは．

プセ　こりゃまいった．あいつ泥の真ん中にはまり込んだぞ．名前を知らないんだ．これじゃ動きが取れない．

バリオ　誰がこれをわしのところへ届けさせたって言うんだ．

シミア　印章を見りゃ分かるだろ．あんたこそ俺の主人の名前を言ってみろ．そうすりゃ，あんたがバリオ本人だって分かる．

バリオ　手紙をよこせ．

シミア　受け取れ．誰の封印かよく見ろ．

バリオ　おお，ポリュマカエロプラギデスだ．正真正銘間違いない．あのひとだ．おい，おまえ，ポリュマカエロプラギデスという名前だ．

シミア　よし，これで俺はちゃんとあんたに手紙を渡したってことだ．ポリュマカエロプラギデスの名前をあんたが言えたんだからな．　(983-91)

脇で見守るプセウドルスは教えるべきことを教えていなかった上に，当面の対処案も浮かんでいない．そのあわてぶりをよそに，シミアはなんなくこれを切り抜けている．

こうして策略に成功し，ポエニキウムを引き取りにシミアがバリオの家に入ったあとの第三場，プセウドルスは，シミアの出てくるのを待ちきれず，心配が大きく膨らむ：

俺はこいつのことがひどくこわくて，薄気味悪いよ．あの置屋にしたみたいに俺

にも悪さをするんじゃないか，うまくことが運んでるいま俺に角を突き立てるんじゃないか，頃合いよしと見たら，俺に悪さしないかって．そんなことは絶対にあって欲しくないな．あいつの味方なんだから，俺は．いま俺は心配で仕方がない．それが三つもあるんだ．まずなによりも，この俺の相棒のことが心配だ．俺を見捨てて，敵側に走るんじゃないだろうか．それから心配なのは，大旦那がいまにも広場から戻ってきて，獲物を分捕ったところで分捕ったなり捕まえられやしないかってことだ．こういうことを心配してるあいだにも，あのハルパクスがここにやってこないか心配だ．こっちのハルパクスが女と一緒にここから出てくる前に来るんじゃないだろうか．まずいなあ，もう．遅すぎるぞ，まだ出てこない．待機中の俺の心臓は荷造りを終わってるよ．もしあいつが女を一緒に連れて出てこなけりゃ，胸の中から逃げ出して亡命できる態勢だ．(1024-35)

さらに，シミアがポエニキウムを連れて現れた第四場，プセウドルスは場違いな非難を飛ばし，シミアからたしなめられてしまう．シミアの芝居に援軍を出すはず(cf. 959)のプセウドルスは逆にもう少しで足を引っ張るところであった：

プセ　何を一体おまえは中で座り込んでたんだ．ずいぶん長かったぞ．心臓が胸を突き破るぐらいやきもきしたよ

シミア　こいつ，ぶん殴るぞ，よりによってこんなときを見つけて俺にとやかく言うのか．敵が隙を狙ってるっていうのに．それより，ここを退き上げよう，威勢のいい行軍でさ．(1044-8)

このように，策略のもっとも重要な場面においてプセウドルスは面目を失いかねない不手際に終始している．もちろん，ハルパクスの替え玉を仕立てる策略はプセウドルスの計画であり，その点で，シミアの成功はプセウドルスの成功だと見なしうる．おそらく，それがこれまで第四幕でのプセウドルスの不手際があまり論議されてこなかった理由でもあろう．しかし，プセウドルスの成功を描くことがこの場面の主要な意図なら，上に観察したほどにシミアとの対照を際立たせる必要はなかったと思われる．

この点で注目されるのは，プセウドルスの焦り，不安に対するシミアの落ち着き，自信という第四幕での対比は第一幕でのカリドルスとプセウドルスのあいだにも見出せることである．

第三場，バリオとの交渉にかかろうとするとき，心配し，焦るカリドルスに対しプセウドルスがこれをたしなめる：

カリ　じゃあ，考えてくれよ．こいつにどんな贈り物をすりゃいいんだ，僕のあの娘を売春婦にしないためには．

プセ　心配しないで．心を落ちつけてください．私のこともあなたのことも心配は私がしますから．・・・今日はこいつの誕生日の贈り物に災難をやりますよ，ずっしり大きいのをね．

カリ　それがなんになるんだ．

プセ　ちょっと他のことを心配しててくれませんか．

カリ　でもね・・・

プセ　それでもね．

カリ　胸が張り裂けそうだよ．

プセ　胸に補強板を張りなさい．

カリ　できないよ．

プセ　できるようになさい．

カリ　どうやれば自分の気持ちに勝てるんだ．

プセ　うまくおさまる方向でまず考えるんです．風向きが悪かったら．自分の気持ちに耳をかさないことです．

カリ　そんなの話にならない．楽しくもなんともないよ，恋をしていて馬鹿なことができないなら．

プセ　まだ言うんですか．

カリ　ああ，プセウドルス君，僕はもうどうなってもいいんだ．どうか気のすむようにさせてくれ．

プセ　そうしましょ．でも，それなら私は行きますよ．

カリ　待って，待って．おまえがそうしろと言うそのとおりにするよ．

プセ　やっとお分かりですね．

（バリオが家の戸を閉め，奴隷の少年のところへ出てくる）

バリオ　一日はすぐにたってしまうのに，わしはこうしてぐずぐずしておる．小僧，前を行くんだ．

カリ　ほら，あいつが行ってしまう．さあ，呼び戻さないか．

プセ　何を焦ってるんです．落ち着いて．

カリ　でも，あいつが行ってしまわないうちに．　(231-41)

第四幕との対応に関しては，とくに，具体策を聞かれて答えを交わすやりとり(235: 930f.)，心配で胸が破れるモチーフ(235f.: 1033-5, 1045)が共通しており，また，「落ち着け」という科白について，第一幕のプセウドルスと第四幕

のシミアとも同じ語句を用いている(quid properas? placide 241=923).

このように，第四幕のプセウドルスは第一幕のカリドルスとほぼ同じイメージないしモチーフによって描かれている．第一幕のカリドルスはプセウドルスにはからかわれ，バリオとの交渉ではまったく相手にされなかった．第四幕でのプセウドルスの行動はこのカリドルスと同じパターンにはまっているものと見られる．

他方，シミアは第一幕から，さらに第二幕のプセウドルスともパラレルをなしていることが認められる．第二幕に登場したプセウドルスは自分の策略が固まったらしく，観客に向かって自信を示す：

> なにもためらうことはないし，こわがることもない．計画はこの胸にしっかりおさめたんだ．まったく愚かなことだ，大きな仕事を小心者に任せるなんてのは．ものごとというのはすべて，いかに実行するか，いかに大きな値打ちあるものにできるかで決まるんだ． (575-8)

この自信満々の登場のあとにプセウドルスはハルパクスから手紙を奪う．この成功と第四幕のシミアの成功にも共通する要素が認められる．プセウドルスは自信の裏づけとして計画のできたことを語っているが，結局これは演じられなかった．ハルパクスの手紙の入手が計画変更を必要とさせたからである．この点で，本当に計画ができていたのかさえ分からない．同様に，シミアも策がすべて頭に入っていることを強調していた(940-1)が，実際の策略場面では，バリオに問われた軍人の名前を聞いておらず，機転を働かせねばならなかった．名前に関する機転という点では，プセウドルスもハルパクスに名前を問われたときバリオの奴隷のスルスと答えることにより成功を引き寄せた：

ハルパクス　だが．あんたの名前はなんというんだ．
プセ　（傍白）ここの置屋の奴隷にスルスというのがいる．俺はそいつだということにしよう．（ハルパクスに）俺はスルスだ． (636f.)

プセ　不死なる神々よ，赤銅にも負けない価値があったなあ，俺のあの嘘には．ここでさっきとっさに俺がついたやつさ．置屋の奴隷だって言ってやったっけ． (688-90)

さて，以上，第四幕でのプセウドルスの不手際をめぐる検討は次のことを示すように思われる．まず，この場面に不手際がすでに認められる以上，第五幕でプセウドルスがシモに一杯喰わされることがあっても必ずしもおかしくはな

い．ただ，劇全般はプセウドルスの活躍によって展開しているのであるから，成功と失敗の混在は主人公に関する役柄の設定や人物描写の一貫性を損なっているという点で，劇の統一性を害しているようにも見える．しかし，その一方，第四幕のプセウドルスは第一幕のカリドルスに，シミアは第一，二幕のプセウドルスに対応し，この対応には同じパターンによるモチーフやイメージがともなっていることが認められる．つまり，第一幕，第二幕で本領を発揮するプセウドルスと第四幕でのプセウドルスはほとんど別人のように見える(16)が，それぞれの場面で与えられるモチーフやイメージのパターンの点では，それに一致した行動を見せているのである．

そこで考えられることは，『プセウドルス』においては，一人の人物が常にその役柄や性格にふさわしい一定の行動をとるというのではなく，むしろ，登場人物に付随するイメージやモチーフが行動を支配し，それらのパターンによって劇の展開が決定されているのではないか，ということである．このことを確かめるために，こうしたイメージとモチーフを，まず，第四幕までについて次に検討してみる．

IV

『プセウドルス』に駆使される多様なメタファーやイメージについてはライトによって論じられている．「芝居」の他には，「攻城」，「料理」，「哲学」などが主なものである(17)．

たとえば，第一幕第三場でプセウドルスはカリドルスに対してバリオ攻略の自信を次のように表現する：

プセ　あの男（バリオ）はこっちのもんです．神様と人間の全部から見放されない限り大丈夫です．私があいつを骨抜きにしてやりますよ(exossabo)．料理人が鰻を開くみたいにね(ut murenam coquos)．さあ，カリドルス，あなたにひと働きお願いしたい．

カリ　なんなりとご命令を(ecquid imperas?)

プセ　（バリオの家を指して）私はこの町を包囲して，今日中に占領したいんですが，この作戦には，頭が切れて，知恵があり，用心深くて，抜け目ない人間が必要です．命令を完遂できる人間です．歩哨に立って居眠りする奴じゃ駄目です．(381-6)

この自信はさらに第二幕冒頭の独白で次のように増幅される：

俺なんかこの胸にまずこうして軍勢を用意した．二重，三重の策略と詐術だ．これで，どこにいる敵に攻めかかるんでも，さあ聞け，我が先祖代々の武勇を心の支えに，我が精進とひとを欺く性根の悪さを頼りとすれば，勝つもたやすく，武具を奪うもたやすい．我が国難の敵は我が詐術の思いのままだ．いま俺はここにいる俺とあんたがたみんなの共通の敵バリオをバリバリバリっと叩き潰してやる(Ballionem exballistabo)．よく見ててくれよ．この町を包囲して，今日中に攻め取りたいんだ．（バリオの家を指して）だからまず，ここへ我が軍団を引き連れて行って攻め落とす．この作戦は俺が我が同胞のため，やすやすと遂行するとして，（シモの家を指して）次に，こっちの古手の町へとただちに我が軍を速やかに率いて行く．この町から俺と味方の全員はともに戦利品をいっぱいに積み出して，恐怖と逃亡を敵方に引き起こす星に俺が生まれついてることを知らしめるんだ．　(578-86)[18]

また，第一幕第五場でシモはカリポに「こいつの言うことを聞いてるとすぐにたぶらかされて，プセウドルスじゃなくて，ソクラテスと話してる気になるぞ」と用心を促し，第四幕第二場でのシミアの芝居の好調な出だしは次のようなやりとりに示される：

シミア　誰かここの通りのひとをあんた知ってるかい．あんたに聞いてるんだ．
バリオ　わしが知ってるのはわしだ．
シミア　たくさんはいないよ，そんなあんたの言うようなことができるひとは．広場に行っても十人に一人いるかいないかだ，自分自身を知ってる人間なんて．
プセ（傍白）　もう安心だ．あいつさっそく哲学をぶってる．　(971-4)[19]

ライトの指摘したこれらのイメージ，メタファーは，上の例にも見るように，プセウドルスの策略の成功に関連している[20]が，これら以外にも，すでに見た「落ち着き・自信」に対する「不安・恐れ」など，登場人物の行動，もしくは，その結果に対応して対比的に用いられるモチーフ・イメージを指摘できる．

「用心」vs.「軽信」

第一幕第一場でプセウドルスは，カリドルスに金の工面を約束した直後，観客に向かって，「さあ，自分は聞いてなかったと言うひとのないよう，みなさんに申します．ここにお集まりの成年男子，すべての国民，すべての私の友人，知人に宣言します．今日一日，私に用心なさい．私を信じてはいけません

(a me ut caveant, ne credant mihi)」(125-8)と自分の策略に注意を促す[21].

この提示は第一幕第五場に繰り返される．この場面，シモは最初からプセウドルスを信用していない．プセウドルスを怒らせるくらいに用心している：

シモ（カリポに）　こいつの言うことを聞いてるとすぐにたぶらかされて，プセウドルスじゃなくて，ソクラテスと話してる気になるぞ．

プセ　さよう，前々からあなたが私を蔑んでいるのは気づいております．とんと私を信用なさってないのも存じております．　(464-7)

シモ　用心せんといかん，おまえが怒ったときにはな．それじゃあ，わしがおまえにいつもするのとは違う鞭打ちをわしに食わせようと考えてるわけだ．（カリポに）あんた，どう思う．

カリポ　まったく，こいつが怒るのももっともだと思うよ．あんたがとんとこいつを信用してないっていうんだから．

シモ　それならもうそれでいい．怒る奴には怒らせとくさ．わしはわしでひどい目にあわされないように用心するよ．　(474-8)

この状況で，プセウドルスがカリドルスの色恋とシモから金をくすねる狙いを白状することにより，言われずとも用心しているシモをさらになお警戒を固めさせたことはすでに触れた．用心する相手に信用してくれとは言わず，より警戒を強めさせることがプセウドルスの策略の下絵を描く約束を引き出した．

第一幕第三場のカリドルスとプセウドルスはこれとは逆を行って失敗する．二人はバリオに対し金の用意ができないことについて，親父からくすねようにも用心深すぎる(tam cauto seni 290)，友人から借金しようにも世の中やすやすと信用しない(omnes cautiores sunt ne credant alteri 298)，信用取り引きをしようにも，十九才法のために，みんな危ないと思って信用しない(metuont credere omnes 304)，と言う．それで信用しろと言っても，バリオでなくとも用心して相手にされない：

プセ　俺を信じてくれ，もし若旦那を信用するのがこわいなら(mea fide, si istis formidas credere)．この俺が三日の間に陸なり海なり，どこかからその金をひねり出してみせるよ．

バリオ　おまえをわしが信用するだと(tibi ego credam?)．

プセ　何がいけない．

バリオ　何と言って．おまえを信用できるくらいなら，まったく，家出犬を仔羊の小

腸で繋ぎとめることだってできるってもんだ.　(316-9)

第二幕第一場，ハルパクスはプセウドルスに対し金に関しては信用して預けることをしない．が，金よりも重要な印章を押した手紙はあっさりと渡してしまう：

ハルパクス　たとえあんたがユッピテル至高神の宝物殿の支出をしきってたとしても絶対にあんたには一文の金だってあずけはしないよ(tibi libellam argenti numquam credam).

・・・

プセ　くたばっちまえ．おまえの正体が分かったぞ．俺の信用に傷をつけに来たんだ．嘘だって言うつもりか，俺がこの六百倍もの額だっていつもひとりであずかってるのを.

ハルパクス　他の者がどう考えようと，俺があんたにあずけなきゃならんことはないだろ.

プセ　おまえの科白を聞いてると，俺がおまえから金をだまし取ろうとしてるみたいだ.

ハルパクス　とんでもない．それはあんたの科白で，俺はただそうじゃないかと疑ってるだけだ.　(628-35)

プセ　だが，俺に渡すつもりなら，もっと楽に片づくぞ．直接渡すのと変わらない.

ハルパクス　どうも分かってないな，どういうことだか．主人が俺をよこしたのは，この金を届けるためで，失うためじゃない．はっきりと俺には分かるが，あんたがかっかきてるのは，この金に爪を突き立てられないからだ．俺は，バリオ当人でなけりゃ，一銭たりとも誰の手にも渡さない(ego nisi ipsi Ballioni nummum credam nemini).

プセ　だが，あちらは手が離せないんだ．裁判所で審理をしてるんだ.

ハルパクス　神々のお恵みがありますように．だが，おれはバリオが家に帰るころを見計らって戻って来るよ．あんた，この手紙を受け取って，バリオに渡してくれ.　(640-7)

第三幕第二場，口からでまかせの料理人の腕自慢の講釈はバリオを疑心暗鬼にし[22]，この掛け合いは，「ひょっとして，あんた，俺の言うことを信用してないな(non credis quae loquor)」(888)という料理人にバリオが「うるさく言うな．おしゃべりにもほどがある．口を閉じろ」(889)と叱りつけて終わる．料理人が家の中に入ったあと，バリオはどのように用心すべきか分からない不安

に取りつかれる：

まったく，何から最初に用心したものか見当がつかん(profecto quid nunc primum caveam nescio)．なにしろ，家の中には盗人がいるし，隣には追い剥ぎがいる．それというのも，ここの隣の家のひととついさっき広場で会ったんだが，つまり，カリドルスの親父さんだが，わしに大層な念の入れようで，あのひとの奴隷のプセウドルスに用心しろ，あいつを信用するな，と言ってた．あいつは今日一日策をめぐらして，わしからどうにかして女を横取りする魂胆だそうだ．あいつはあのひとにしっかりと約束したって話だ，わしからポエニキウムを策略で奪い取るぞって．さあ，中へ入って，家の連中に言っといてやろう，絶対に誰ひとり何があってもプセウドルスを信用しちゃならんとな(profecto ne quis quicquam credat Pseudolo).
(894-904)

この不安のためか，バリオはシミアへの用心を欠き，その芝居にだまされる一方，本物のハルパクスを替え玉と思いこみ，見当違いのからかい芝居[23]を仕掛けてしまった．シモはバリオに言う：

プセウドルスをあんたに引き渡せって？ あいつになんの落ち度があった．言ってやったじゃないか，あいつには用心しろって．百ぺんは言ったぞ． (1226f.)

「生」vs.「死」

第一幕，カリドルスは登場してきたときから生気がない．彼の魂は手紙の中へと抜けてしまっている：

プセ　どういうことなんです，あなたが魂の抜け殻みたいに(exanimatus)この何日ものあいだずっと手紙を持ち歩いては，涙で洗い，あなたの考えを誰にも打ち明けないというのは． (9-11)

プセ　（手紙を読みますから）心を集中して聞いてくださいよ(advortito animum).
カリ　心はどこかへ行ってしまった(non adest).
プセ　じゃあ，呼び戻してくださいな．
カリ　それより僕は黙っていよう．おまえがその手紙から呼び戻してくれ．僕の心(animus)はいまその中なんだ．胸の中にはないんだ． (32-4)

こんな状態のカリドルスにポエニキウムが求める「無事・身の安全」(salus)を与えられようはずがない：

プセ　「ポエニキウムが恋するカリドルスに鑞板と文字を仲立ちとして，あなたのご無事を(salutem)お祈りし，我が身の無事の保証を(salutem)あなたにすがり求めます．いまは涙に濡れ，魂も心も胸も揺れ乱れています．」

カリ　僕はおしまいだ(perii!)，プセウドルスよ．無事の保証(salutem)などどこにも見つけてやれない．彼女に送り返してはやれないんだ．

プセ　どんな無事の保証です(quam salutem?).

カリ　銀貨にのせたやつだ(argenteam).

プセ　板に書いた無事のお返しに銀貨にのせて無事の保証を(pro lignean salute argenteam)彼女に送りたいんですか．よくお考えなさい，どういう取り引きをなさってるか．(41-8)

それどころか，「僕はおしまいだ」(45)と言うカリドルスは自分のほうが先に命を断とうとする．それを冗談で諌めて，カリドルスを生かそうとするところからプセウドルスが金の工面を約束する：

カリ　僕は今日で一巻の終わりだ(actum est de me)．だが，おまえに借りられないかな，たった一ドラクマでいいんだ．明日には返すよ．

プセ　滅相もない．私の体を質草にしたってだめですね．でも，その一ドラクマでどうしようというんです．

カリ　ロープを買いたいんだ．

プセ　なんのために．

カリ　そいつで首を吊るんだ．闇に閉ざされる前に闇の世界に行く覚悟なんだ．

プセ　それじゃ，誰が私に返してくれるんです，あなたに貸す一ドラクマは．それともあなた，はじめからそれが狙いで首を吊ろうっていうんですか．あなたに一ドラクマあげたら，だまし取ろうってつもりですか．

カリ　間違いないんだ，どうしようとも僕は生きていけやしない(profecto nullo pacto possum vivere)，彼女が僕の手を離れて連れ去られることになったら．

プセ　間抜けな郭公みたいに泣かないでください．生きていけますよ(vives)．(85-96)

死人のようなカリドルスに対して，バリオは今日が誕生日である．バリオはカリドルスをはなから相手にしていない：

プセ　今日が誕生日のひとやあい．今日が誕生日のひと，あんたのことだよ．おおい，今日が誕生日のひと(hodie nate, heus, hodie nate, tibi ego dico, heus hodie nate)．戻ってこいよ．こっちを見てくれよ．あんたも用事はあるだろうが，こっちも用があるんだ．待ってくれ．ここにあんたと話のあるひとがいるんだ．

バリ　なんだ，これは．誰だ，こっちには用事があるのに，うるさく用を持ち込んだ奴は．

プセ　その昔あんたのためになることをしてやった(sospitalis fuit)ひとさ．

バリ　その昔の人間なら死んだも同然(mortuost qui fuit)．必要なのはいまためになってくれる人間だ．　(243-8)

カリ　金ができれば払うよ．

バリ　女を連れ出すなら金を持ってるときにすることだ．

カリ　なんてことだ．なんてひどい目にあうんだ．おまえに届けたものも払ったものも無駄になったんだ．

バリオ　金を無駄にした上にいまは言葉を無駄にして(mortua verba re facis)，お馬鹿さんだな．済んだことは済んだことさ(rem actam agis)．　(257-60)

バリ　あんたは手ぶらで来て，言うことだってチャリンともしない．それでも，わしはあんたが無事に生きてて(vivom salvomque)もらいたいと願ってるよ．

プセ　おい，若旦那はもう死んでるって(mortuost)言うのか．

バリ　どっちにしても，わしから見れば間違いなく，こんなことを言ってくる人間は死んでるね(mortuost)．置屋に泣きつくときは恋する者の命の果てる(vixit)ときさ．　(308-11)

第二幕，プセウドルスは自分の策略の才を「生まれつき」と強調する：

恐怖と逃亡を敵方に引き起こす星に俺が生まれついてる(natum)ことを知らしめるんだ．俺はそういう生まれつきなんだ(eo sum genere gnatus)．大きなことをしでかすのが俺には似合いだ．　(598-90)

第三幕，バリオは料理人の料理が死人のためのものと思っていた：

まったく，これだから冥界の神も自分のところには置きたくなかったんだ．それだから，死人の食事をつくってりゃいい奴(qui mortuis cenam coquat)がこの世に残ってるってわけだ．こいつぐらいのものだよ，あの世の連中が気に入りそうな料理を作れるのは．　(795-7)

しかし，料理人は他の料理人の「死」に対して自分の料理の「生」を強調する：

料理人　俺が出す宴の調理法は他の料理人たちとは違う．あいつらは野原いっぱいの野菜に味つけして皿に盛りつける．宴の客を牛扱いだ．香味野菜を山盛りにし

て，その香味野菜にまた別の香味野菜で味つけする．セリ，ウイキョウ，ニンニク，パセリをのせる．スイバ，キャベツ，甜菜，ほうれん草を盛る．そこにアギの汁をカップ一杯注ぎかける．辛子をすりおろすんだが，これが罪つくり．こいつをすってると，すり上がるより先に目がひりひり涙ぐんでくる．こういう連中が宴の料理の味つけをしてるところじゃ，調味料じゃなくて，吸血ふくろうを味つけに使うんだ．こいつは生きたままの宴の客の内臓を食い尽くす(vivis convivis intestina exedint)．これだから，このあたりのひとの命はこんなに短いんだ．命を大事にしてるつもりで，こういうたぐいのこういう香味野菜を自分の胃袋にため込んでる．言うもおぞましい．食べたらなおさらだ．家畜が食べない香味野菜をひとが食べてるんだ．

バリオ　おまえはどうなんだ．神様がくれた調味料を使っているのか．そいつでひとの寿命を延ばせるんだろうな(prorogare vitam possis hominibus)，それだけひとの調味料をけなすんだから．

料理人　誰憚らず，そう言ってもらいたいね．まあ，二百年でも生きられるだろうな，俺が味つけした食べ物を食べ続ければね．まあ，俺がコキレンドルムやらケポレンドルムやらマッキスやらサウカプティスを鍋に入れたら，鍋がひとりでに即座に熱くなってくる．こういうのは海神ネプトゥヌスの家畜の肉に使う調味料だが，陸上の家畜の肉はキキママンドルムかハパロプシスかカタラクトリアを使って味つけするんだ．

バリオ　ああ，おまえなんかユッピテルとよろずの神々の力でくたばればいいんだ．おまえの調味料とおまえのその大法螺ともどもにな．

料理人　頼むよ，先を続けさせてくれ．

バリオ　続けるがいい．そのままさらし首にでもなれ．

料理人　全部の鍋に火が通ったところで全部の蓋を開ける．と，香りは両腕をいっぱいに振って天へと飛んで行く．

バリオ 何，香りが両腕をいっぱいに振るだって．

料理人　うっかり間違えたんだ．

バリオ　どう間違えたんだ．

料理人　両脚をいっぱいに振って，と言いたかったんだ[24]．その香りこそユッピテルの毎日の食事なんだ．

バリオ　どこへもおまえが料理しに出かけなかったら，何がユッピテルの食事になるんだ．

料理人　食事なしで床につくんだ．　(810-46)

料理人　どうしてって，俺の特製スープを今日はあんたに作ってやるからさ．こいつ

は，メデアが老ペリアスを鍋で煮た話で秘薬と毒薬の力で老人から再び若者へとよみがえらせたと言われるように，それと同じ効果をあんたに与えるんだ．

バリオ　なんて奴だ．おまえは毒薬まで使うのか．

料理人　とんでもない．神明に誓って人々の救済者だ(hominum servator).

バリオ　それじゃ，いくらならおまえの料理法を一つ伝授してくれるんだ．

料理人　なんのために．

バリオ　おまえを救済するのさ(ut te servem)，わしのものをかすめ取ったりしないようにな．　(868-76)

第四幕，プセウドルスの策略にはまったと分かったときのバリオは，それを自分の命が取られたかのように表現する：

バリオ　プセウドルスだったんだ．間違いない．おしまいだよ，わしは(actumst de me)．もう生きてられないよ(iam morior)，シモ．

ハルパクス　そんな，あんたに死んでもらうわけにいくか(te hau sinam emoriri)．まず金を返してくれ．二十ミナもの金なんだぞ．

シモ　それにわしの二十ミナもあるぞ．

（5行略）

バリオ　わしはどうすればいいんだ．

ハルパクス　俺に金をよこしたら，首を吊るがいい．

バリオ　くたばれ，こいつめ．・・・よし，じゃあ，わしのあとについて広場にこい．金を払おう．

ハルパクス　ついてくよ．

シモ　わしのほうはどうなんだ．

バリオ　いまはよその国のひとへの払いだ．明日かたをつけるよ，この町のひととは．プセウドルスの奴め，わしにケントゥリア民会の死刑判決を下してくれた(Pseudolus mihi centuariata habuit capitis comitia).

（4行略）

バリオ　わしは決めたよ．今日はわしの命日の法要だ．誕生日祝いはやめだ(certumst mihi hunc emortualem facere ex natali die).　(1221-37)

この「生」と「死」の対比では，とくにカリドルスとバリオの「死」を表すのに共通して用いられた actum est de me(85, 1221; cf. 260)という表現が注目される．というのも，これは「私の芝居が終わった」という意味に解すことができる．その点で，「芝居」の文脈とも密接に関連していることが窺えるからで

ある.

「颯爽・立」vs.「無様・倒」

第一幕第五場でプセウドルスがシモとカリポの前に進み出たとき，次のようなやりとりがある：

シモ　いい日和だ，どんな具合だ(salve. quid agitur?).

プセ　立っております，ここにこんな具合に(statur hic ad hunc modum).

シモ　こいつの立ってるところを見てやってくれ，カリポ．まるで王様気取りだ(statum vide hominis, Callipho, quam basilicum!).

カリポ　立派で自信たっぷりな立ちっぷりだってことはよく分かる(bene confidenterque astitisse intellego).　(457-9)

これに似た提示は第一幕第二場のバリオについてもなされた．バリオが遊女らに次々命令を言いつけるのをカリドルスとプセウドルスが立ち聞きしている場面である：

バリオ　町中でわしの呼び名が変わり，置屋のバリオじゃなくてイアソン大王と呼ばれるようにしたいんだ.

カリ　（プセウドルスに）聞いたか，悪党の話しぶりを．ずいぶんと大見得切るじゃないか(satin magnuficus tibi videtur?).

プセ　まったくもって．そのうえ，ひとを裏切る奴ですよ.　(192-4)

また，第四幕第一場でシミアは「ほら，あそこに来たよ．殴られるのが板についた（立ち）姿だ．歩く姿も華々しい登場だ」(eccum video verberam statuam: ut it, ut magnufice infert sese! 911)というプセウドルスの言葉に導かれて登場する．このシミアには，「ドジを踏むな」(vide ne titubes 942)という注意は無用であった.

こうしたプセウドルスらのしっかりした立ち姿[25]に対し，第一幕のカリドルスとポエニキウムは，すぐに倒れそうなイメージで語られる：

カリ　まるで真夏に生える草のように，僕が僕であったのはほんの束の間．突如として立ち上がったが，突然また倒れ伏した(quasi solstitialis herba paullisper fui: repente exortus sum, repentino occidi).　(38-9)

プセ　「魂も心も胸もよろめいています(titubanti animo, corde et pectore)」　(44)

第四幕第二場でシミアのカモにされるバリオは，その登場のとき，足元がおぼつかぬ様子である：

シミア　あれを見ろよ．斜めになってる．まっすぐ前へ歩けないんだ．まるで蟹みたいだ(illuc sis vide, ut transvorsus, non prorsus cedit, quasi cancer solet).　(954f.)

V

以上，登場人物の行動と結果とに関連するモチーフ，イメージを第四幕までについて観察した．これらを踏まえて次に第五幕を見直してみる．

第一場に登場したプセウドルスは酒のために足がふらついている：

どうしたんだ，これは．これでいいのか，俺の右足と左足．おまえたち，立っているのか，立ってないのか(statin an non?)．それとも，俺がここでひっくり返ってるところ(iacentem)を誰かに運んでもらうのがいいのか．誓って言うが，俺が倒れたら(cecidero)，おまえたちだぞ，恥をかくのは．まだ，まだまだっていうのか．それ，今日は厳しくしなきゃならんな．このつまずきのおおもとは酒だ．足を最初に引っかけるとは食わせ者の力士だ(pedes captat primum, luctator dolosust).　(1246-51)

彼は，自分がこれほどに酔った宴の悦楽を長々と描写する(1253-72)が，この中で「これだから，ひとは人生を愛するんじゃないか・・・まるで神々と並んで天国にいる気分だ」(hoc est homini quam ob rem vitam amet... deis proxumum esse arbitror 1255f.,1258)と言う．宴は「生」の源のように表現されている．

ところが，いまプセウドルスは，その楽しい酔いをさまそうと思って出てきた．そのきっかけとなったのは，宴会の席で転んだことである：

だが，俺が立ち上がった(exsurrexi)とき，みんな俺に頼むんだ，踊ってくれって．（ステップを踏みながら）こんな調子で俺はみんなに巧みな足運びを見せてやった．しっかり修行を積んでるんだ．なんと言っても俺はイオニア流の免許皆伝さ．ともかく俺はマントを引っかけて，こう，こんなふうにステップを踏んだよ．軽いもんだ．拍手に「アンコール」のかけ声で，俺はもとのところに戻る．最初からまたはじめたよ．こんな調子だ．やりたくはなかった．俺だって俺の好いた女に身をあずけて愛してもらってるところだったんだ．くるくるっと回ってみせたら，転んでしまった(ubi circumvortor, cado)．それが幕引きの歌になった(id fuit naenia ludo).

立とうと踏ん張ってるあいだに，うおっと，もうすんでのことに汚すところだったよ，マントをさ．それがまた受けたの受けないのって，まったく，たまたまそうなっただけなんだが．一杯注いでもらって飲んだよ．俺はすぐにマントを着替えて，替えたやつは捨ててしまった．それからここへ出てきたんだ，まわった酔いをさまそうと思ってね．(1273-82)

このように，第一場のプセウドルスには「無様・倒」のイメージが顕著に認められる．この点で，まず，プセウドルスが自分の両足に呼びかけることにはそれだけの意味が込められているかも知れない．というのは，第四幕でハルパクスから手紙を奪った人間をプセウドルスと同定する決め手は彼の大きな足だったからである：

バリオ　おい，あんた，どんな風体だった，前にあんたが印章を渡した奴は．
ハルパクス　赤毛の男で，腹が出てて，太いふくらはぎ，色は浅黒く，頭がでかくて，鋭い目，赤ら顔，相当に大きい足だ．
バリオ　やられた．足のことを言われてはもうだめだ．(1217-20)

また，プセウドルスが立ち上がって，踊ったあと，すぐに倒れたことは第一幕のカリドルスの「突如として立ち上がったが，突然また倒れ伏した」(repente exortus sum, repentino occidi 39)という科白を想起させる．

この「倒」はまた「死」のメタファーとも重なり合う．まず，転んだことが踊りの「幕引き」となり，プセウドルスは「生」を象徴する宴から出てきた．また，ここで「幕引きの歌」と訳した naenia ludo(1278) は，字義どおりには，「芝居にとっての挽歌」である．つまり，この表現では，一方に，「踊り」＝「生」＝「芝居」という連想があり，他方に，それらの終了として「倒」＝「死」＝「終幕」という暗示があるように思われる[26]．この点で，上に見たように，同じ「倒」＝「死」＝「終幕」というイメージパターンが第四幕のバリオにも認められたことにも注意しておきたい．

また，「終幕」の連想に関連して，マントが踊りに重要な役割を果たしているのが注目される．プセウドルスはマントを引っかけて登場し(palliolatim amictus sic haec incessi ludibundus 1275)，転んで立ち上がろうとしたときに汚し(itaque dum enitor, prox! iam paene inquinavi pallium 1279)，宴から出てくる前に着替えて捨ててしまった(commuto ilico pallium, illud posivi 1281)．マントは喜劇の奴隷のシンボルとも言える．プセウドルスはそれを台無しにしてしまった

と語っている．これはあたかもプセウドルスが奴隷の芝居の幕を下ろしたかのような暗示とも受け取れる．

このあと，プセウドルスが「さあ，若旦那のところから大旦那のところへ行って，契約を思い出させよう」(1283)と言ってシモを呼び出す．その第二場，プセウドルスの酔態にシモは呆れながら，第四幕末で語った策略を想起させる傍白をする：

シモ　まったく好き放題だな，こいつは．（傍白）だが，見てくれよ，あの態度．わしの面前だからといって畏まる気持ちが少しもないのか．どうだろう，厳しく叱ったものか，甘い言葉で話したものか．だが，こいつがあるうちは力づくでいくわけにはいかない．このままもっておける希望がまだあるんだから[27]．　(1288-91)

が，シモに対したプセウドルスに第四幕でのような「恐れ」はなく堂々としている．それどころか，主人に向かって酒臭いげっぷを吐きかける：

プセ　（抱きついて，げっぷをする）はあっ．
シモ　（プセウドルスを押し退けて）おまえなんか，消えてなくなれ．
プセ　どうして私が突き飛ばされるんです．
シモ　おまえこそ，くそ，どうしてわしの顔に酒臭いげっぷを吐きかけるんだ．
プセ　（もう一度抱きついて）やさしく，そうやって支えててください．気をつけて私が倒れないようにお願いします．分からないんですか，私の体じゅう酒がしみとおってるのが．
シモ　なんというこれは鉄面皮だ，そんなふうに真っ昼間から花冠をかぶったなりで酔っぱらって歩くとは．
プセ　気持ちいいですよ．
シモ　なに，気持ちいいだと．まだげっぷをわしの顔にするのか．
プセ　心地よいげっぷですよ，私のは．好きにさせてくださいな，大旦那．
(1294-1301)

さらに，シモから金を受け取るときにも侮辱を加える：

シモ　おまえがどんなことをやったのか，一部始終知っておる．
プセ　それじゃあ，なにをためらって私に金をくださらないんです．
シモ　正当な要求だ．認めるよ．さあ，受け取れ．（財布袋を差し出す）
プセ　でも，あなたは言ってなかったですかね，私にはやらないぞって．ところがやっぱりくださるんだ．さあ，それをこっちに担がせてください．それで私のあとに

ついてこっちへ来てください.

シモ　わしがこいつに担がせるというのか.

プセ　担がせてくれますよね.

シモ　こいつをわしはどうしてやればいいんだ. そこまでするのか, 金を取った上にわしを笑いものにするとは.

プセ　負けたが運の尽きですよ.

シモ　それじゃあ, 肩を回して背中を向けろ.

プセ　さあ, どうぞ.

シモ　こんなことになるとはちっとも思っていなかった. わしがおまえの慈悲を乞うなんて. (泣き声で) ああ, ああ, ああ.

プセ　いい加減になさい.

シモ　耐えられない痛みなんだ.

プセ　あなたが痛まなけりゃ, 私が痛い目を見るってことです.　(1312-20)

シモに加えられるこの二つの侮辱について気づかれるのは, まず, プセウドルスがげっぷを吐きかけるときシモに抱きつき, 支えられていることである. 第一場での千鳥足のモチーフがここに引き継がれていると見られる.

二つ目の侮辱では, 「負けたが運の尽き」(vae victis 1317)という言葉が目を引く. というのも, この言葉は前387年にローマを攻囲したガリア軍の王ブレンヌスの言葉として知られるが, そのときの経緯とここでの金の授受とには共通する要素が認められる.

リウィウスによれば, カピトリウムに立て篭もったローマ市民は飢えに耐えられず, 元老院が講和の使者を送った. 軍団副官スルピキウスとブレンヌスのあいだの交渉の結果, 千ポンドの黄金を支払うことに決した. その支払いだけでも耐え難いことであったが, ガリア人は黄金を計量する秤に不正な重りを用いた. スルピキウスが抗議すると, ブレンヌスは剣を重りに加えたうえ, この愚弄の言葉を発した, という(Liv. 5. 48. 7-9).

そのときのローマ人と同じように, シモも取り決めによってプセウドルスに金を渡す. 金を渡す取り決めの条件はバリオからポエニキウムを奪うことであった. このシモとバリオへのプセウドルスの策略が「攻城」のメタファーで語られていたことは上に見たとおりである.

また, プセウドルスが取り決めに従って金をもらうだけで終わらず, 財布袋を自分の肩に背負わせるという形で, さらに辱めを加える点もブレンヌスの場合と共通する. それに対して, 不正な計量に抗議したスルピキウスのように,

シモは「金を取った上にわしを笑いものにするとは」(satin ultro et argentum aufert et me inridet? 1316)と悔しさを表す．と，まさにこのとき，「負けたが運の尽き」という愚弄の言葉が発せられる．そして，シモは「わしがおまえの慈悲を乞うなんて」(ut tibi fierem supplex 1319)と，あたかも助命嘆願をするかのようである．

この対応関係では，プセウドルスがブレンヌスに，シモがローマ人にそれぞれ対応している．すると，ローマ人の観客から見れば，プセウドルスには傲慢な敵役のイメージ，シモには不当な辱めに耐える同胞のイメージが重ねられていることになる[28]．

この二度の侮辱を受けたあとにシモは渡した金の一部を返すよう頼む：

シモ　おい，これを取るのか．プセウドルス君，おまえの主人から取るのか．
プセ　心底これに勝る喜びはありません．
シモ　おまえの度量で，どうだ，頼む，少しばかりおまけしてくれないか，その金の一部でも．
プセ　だめです．私を守銭奴呼ばわりしたらよろしい[29]．一文だってあなたの金は増えませんよ．それに，あなただって私の背中に情けをかけてくれはしなかったでしょうよ，今日のことで私がうまくやれていなければね．
シモ　いつかどこかでこの借りは返すぞ，わしが生きてる限りな．
プセ　なんです，脅しですか．私の背中が受けて立ちますよ．　(1321-5)

ここでシモは返金を求めるのに，まず哀願し，次に脅しをかけている．このことはシモが第二場に登場したときの傍白「どうだろう，厳しく叱ったものか，甘い言葉で話したものか」(cogito saeviter, blanditerne adloquar 1290)と対応するように見える．その点で，これを第四幕末で予告された策略の一部と見なすことは可能と思われる．また，この時点で，すでにカリポの出番がなくなっていることにも注意すべきかも知れない．プセウドルスが一度受け取った金の中からシモに返金したのなら，返金分はシモの儲けになるという事情があとから分かってもプセウドルスにはどうしようもない．カリポを呼んでも証文の出し遅れである．しかし，その一方で，ここでのシモには渡した金を取り戻す算段が立てられているようには見えない．哀願も脅しもプセウドルスにはねつけられると，すぐにシモは怒って立ち去ろうとする：

シモ　よし，勝手にしろ．（立ち去ろうとする）
プセ　戻りなさい．

シモ　なんで戻るんだ.
プセ　戻ればいいんです．だましはしませんよ.
シモ　戻ったぞ.
プセ　私と一緒に行きましょう．一杯やりましょう.
シモ　このわしが一緒に行くんだって.
プセ　私がしろということをやってください．一緒に来れば，この金の半分かそれより多くでもあなたに差し上げますよ.
シモ　行くよ．どこへなりと連れてってくれ.　(1326-8)

シモは「だましはしませんよ」(non eri' deceptus 1326)というプセウドルスの言葉にすぐに従い，返金の約束を信じてしまう．シモには「用心」が欠けている．第四幕までについて上に見た用心深いシモとは思えないほどである．この同意はそのまま幕切れを導く：

プセ　さて，どうです，大旦那．怒ってなんかいませんよね，私にも御子息にも今度のことではもう.
シモ　もちろん，ちっともさ.
プセ　さあ，こちらへ.
シモ　おまえが先に行け[30]．どうして招待しないんだ，観客も一緒に.
プセ　とんでもない．このひとたちが私を招待してくれるなんてことはないですし，だから私もこのひとたちを招待しないんです．（観客に）でも，あなたがたが拍手喝采をこの一座と芝居にくださろうというなら，明日の公演にご招待しますよ.
（二人退場）　(1329-34)

以上の第五幕の観察によれば，プセウドルスには，「無様・倒」，「死」，「終幕」のイメージが認められた．これらについて気づかれるのは，第一に，第一幕および第二幕，とくに第一幕第五場でのプセウドルスとの対比，第二に，第四幕でのバリオとの対応である.

すでに見たように，プセウドルスは，第一幕第五場では，シモとカリポの前へ出たとき堂々とした立ち姿を見せ，この場面で彼の芝居の幕開きが示されていた．また，第一幕第一場では，嘆きのあまり死のうとするカリドルスを笑いで諌めて生かそうとし，第二幕冒頭では，自分が策略のために生まれた，と言う.

第四幕でのバリオは，登場のときに無様な斜め歩きを見せ，策略にはまったと分かったとき「死」＝「終幕」が表現された.

プセウドルスに関する対比と対応は第五幕でのプセウドルスになんらかの失策を暗示するように思われる．この点で，敵役ブレンヌスとの対応も意味をもちうるであろう．そして，その失策はシモへの返金の約束であろうと推定される．これにより，バリオから20ミナを受け取るはずのシモには，プセウドルスから返されただけの金がまるまる儲けとなり，カリポを呼んでの調停という面倒もなく，思惑が満たされることになる．

しかし，シモについて策略の成功を提示するようなモチーフやイメージの対応は見当たらない．はっきりと認められるのは用心の欠如だけであり，これは第一幕第五場でのシモと対比をなしている．返金の約束はプセウドルスの気まぐれによる望外の結果としか見えない．とすれば，シモの狙いは結果的に実を結んだとしても，第四幕末での声高な宣言に比して尻すぼみの結末と言わなければならなくなる．

ただ，ここであらためて気づくのは，第五幕と第一幕第五場の緊密な対応ないし対比である．すなわち，本稿の着眼となった「他の喜劇とはひと味違う」「芝居」の文脈の対応，その開幕と終幕，プセウドルスの「颯爽・立」に対する「無様・倒」，シモの「用心」に対する「軽信」である．これら二つの場面の対応関係で第五幕に欠けているのはカリポの存在ぐらいしかない．この点でもあらためて第五幕にカリポの出番がないことに特別な意味があるのではないかと詮索したくなる．しかし，本当に第五幕の場面にカリポの姿はないのだろうか．

VI

第一幕第五場でプセウドルスがカリポに証人を頼んだやりとりをもう一度，次に記してみる：

プセ　今日一日だけ頼まれてください(da in hunc diem operam)，カリポさん，どうかお願いです，どこかの違う用事で手がふさがってるってことのないようにしてください．

カリポ　本当は田舎へ出かけるつもりで昨日のうちに心に決めてたんだが．

プセ　ではいま，そのつもりを決め直して，こっちに狙いをつけなさい．

カリポ　よし，出かけないことに決めたよ，おまえのためにな(nunc non abire certum est istac gratia)．楽しみだよ，おまえの芝居を見物するのは(lubidost ludos tuos spectare)，プセウドルスよ．

（4行略）

プセ　さあ，お二人とも，もうここからお引き取りください．私の計略に出番を譲ってください．

カリポ　そうしよう．おまえの言うとおりにしよう．

プセ　でも，あなたはずっと家にいてくださいね(te volo domi usque adesse).

カリポ　いるさ，おまえの頼みは承知してるよ(quin tibi hanc operam dico).　(547-60)

このやりとりでは，プセウドルスが頼みを切り出す科白(da operam 547)とカリポの退場の科白(operam dico 560)とが対応し，カリポが田舎へ出かけず，証人として家に残ることが強調されている．そして，それは今日一日だけプセウドルスの芝居を見物するためと言われている．カリポが自分を観客となるかのように表現しているのは間違いない．このことからゲルラーは，気の利いた演出家はこの場面のあと観客席の中にカリポの席を定めたかも知れない，という推測を示した[31]．この示唆は簡単な注記にとどまり，それ以上に議論が進められていない．が，もしカリポが観客席にいるのなら，第五幕，とくに幕切れの場面において，自身の科白はなくとも，舞台上のプセウドルスやシモの科白に対応した所作を示した，と想像してみることは，少なくとも，演出の一つの可能性として意味があるように思われる．

シモ　どうして（宴会に）呼ばないんだ，観客も一緒に(quin vocas spectatores simul?).

プセ　とんでもない．このひとたちが私を招待してくれるなんてことはないですし，だから私もこのひとたちを招待しないんです(hercle me isti hau solent vocare, neque ergo ego istos).（観客に）でも，あなたがたが拍手喝采をこの一座と芝居にくださろうというなら，明日ご招待しますよ(in crastinum vos vocabo).　(1331-3)

ここで想定してみたいのは次のような演出である．シモが観客も呼ぼうと提案したとき，カリポが観客の中から立ち上がり，自分の顔に指をさして「私も呼んでくれ」と言うかのような仕草をする．が，このときすでに舞台袖へ進みかけていたプセウドルスはカリポのほうを見ずにシモの提案を退ける．それを後ろで聞きながらシモは，プセウドルスの背中の財布袋を指さしつつ，にんまりとした顔をカリポのほうに向けて，「あれはわしのものだ」という仕草をする．出番を奪われた上に宴会にも呼んでもらえないカリポは期待を裏切られた驚きを表情に示す．

もしこのような演出がなされるとすれば，シモが金をせしめ，その点でプセウドルスがシモの策略にのせられたことがよく表現されるように思われる．た

だ，この場合もプセウドルスに対してシモの策略が見事に成功したとは見えない．最終的にカリポの出番を消しているのはプセウドルスだからである．むしろ，つんぼ桟敷にされたカリポの驚きに表されるように，ここには『プセウドルス』という劇が観客に対して仕組んだ仕掛けが演じられていると考えることができるのではないだろうか．このことに関連して二つのことが気づかれる．第一はカリポの名の含意，第二は，プセウドルスが劇冒頭で観客に対して呼びかけた警戒である．

カリポ(Callipho)の名は「美しい声」を意味しており，仲裁役を務める人物に実にふさわしい，と言える．ところが，この声を発する場が失われたことで，カリポはその名に背いた形となっている．これと同様のことはハルパクスとカリヌスにも見出せる．

ハルパクス(Harpax)は，次のやりとりにも表現されるように，「略奪者」を意味している：

プセ　ところで，なんというんだ，おまえの名前は．
ハルパクス　ハルパクス（分捕り屋）だ．
プセ　さっさと消えろよ，ハルパクス．おまえは気にいらん．おまえは絶対にこの家の中には入れんぞ．何一つ分捕らせはせん(ni quid ἅρπαξ feceris).
ハルパクス　敵の生け捕りが俺のいつもの戦線からの手土産だ．それで俺はこういう名前なんだ．　(653-5)

ところが，彼は手紙をプセウドルスに横取りされ，ポエニキウムを連れ去ることができず，芝居におけるハルパクスの名をシミアに奪われてしまう：

シミア　ユッピテルの力で，そいつが同じ場所に姿を現すことにならないかと思うくらいさ，軍人のところから来たそいつが誰であろうとな．誓ってもいいが，絶対にそいつには無理だよ，俺より立派なハルパクスになろうったって．　(923-5)

カリドルスが助っ人として呼んできたカリヌス(Charinus)の名には「好意」ないし「感謝」の意味が含まれる．ところが，彼が登場したとき，彼自身は必要な助っ人に役不足で，彼の好意はプセウドルスにとってありがた迷惑となってしまっていた：

プセ　誰です，そちらは．
カリドルス　カリヌス君だ．

プセ　こりゃあいい．借りんですましたい有り難い助っ人だ(χάριν τούτῳ ποιῶ).
カリヌス　必要なら，遠慮なくなんなりと言いつけてくれていいよ．
プセ　有り難いのは山々ですが(tam gratia)，ご自分のことをお考えください．私たちのことであなたに厄介をかけたくはないんです．　(712-4)

こうしたハルパクスとカリヌスについての提示はカリポについても同様に，その名に背いて出番を失うことがこの幕切れ場面の演出であった可能性を示唆するように思われる．

また，観客へのプセウドルスの最初の呼びかけは次のようであった：

プセ　そのこと（＝金策）なら，どちらの目でも安心して枕にのせて寝てください．
カリドルス　目だって．耳じゃないのか．
プセ　でも，こっちのほうがありきたりでない言い方ですよ．（観客に向かって）さあ，自分は聞いてなかったと言うひとのないよう，みなさんに申します．ここにお集まりの成年男子，すべての国民，すべての私の友人，知人に宣言します．今日一日，私に用心なさい．私を信じてはいけません．　(123-8)

ここでプセウドルスが冗談によって実例を示す「ありきたりでない言い方」(pervolgatum minus 124)が第一幕末での「いままでにないやり方で，いままでにない工夫」(novo modo novom aliquid inventum 569)や第四幕末でのシモの「他の喜劇とひと味違うやり方」(alio pacto quam in aliis comoediis 1239f.)という科白と同様の提示をなしていることは疑いないであろう．観客はそのありきたりでないやり方に用心しろ，と言われている．ところが，すでに見たように，シモやバリオも同じように用心を促されながら，プセウドルスの策略にはまってしまった．この対応は，ここで警戒を呼びかけられた観客に対する幕切れの場面での仕掛けを指示しているように考えられる．この点で，そうしたありきたりでないやり方が「できない者はできる人間に出番を譲るべきだ」(si id facere nequeat, det locum illi qui queat 570)と言われていたことにも注意すべきであろう．この宣言のとおりに，カリポから出番を奪うことにより，幕切れ場面はありきたりでない結末を迎えた，と見られるのである．

そこで，これまで見てきたところが正しければ，幕切れでの仕掛けは二重に仕組まれていると理解される．第一の仕掛けは舞台上で主人公の奴隷が大旦那による「他の喜劇とひと味違うやり方」で一杯喰わされる結末，第二の仕掛けは第一の仕掛けに観客席からカリポが代表して参加する演出である．

とくに第二の仕掛けの点では，観客も劇を構成する重要な役割を担っている，と言える．プセウドルスの観客に向けた幕切れの科白はこのことをよく示すように思われる：

> でも，あなたがたが拍手喝采をこの一座と芝居にくださろうというなら，明日ご招待しますよ(in crastinum vos vocabo). (1334)

プセウドルスが観客に警戒を呼びかけたとき，それは「今日一日」(in hunc diem 128)のことと言われ，カリポに証人役を頼んだのも「今日一日」(in hunc diem 547)のことであった．劇が演じられるのは「今日」であり，それはいま終わろうとしている．「明日」に劇はなく，「明日ご招待」は決して演じられない．ここで比べてみたいのは第四幕でのバリオの退場場面である．バリオは，シモに20ミナ支払いについて尋ねられて，「明日かたをつけるよ，町のひととは」(cras agam cum civibus 1231)と言う．しかし，ここで退場したバリオは二度と登場しない．それはバリオ自身が観客に予告している：

> さあ，わしがまたこの道を通って帰ってくるなんて期待しないでください．こういうことになった以上，こっちの裏道を通るのに決めてるんだから． (1234-5)

この場面でバリオの役割が終わり，「明日」の登場がないように，幕切れでの観客への「明日ご招待」は観客がこの芝居の役割，つまり，劇の仕掛けに参加して見事に一杯喰わされる役を演じてくれたことに感謝と皮肉を込めて表した表現であろうと思われる．

注

『プセウドルス』のテキストは基本的に Lindsay に従う．異読，異なる科白の割り当てによって解した箇所は注記した．主な参照および引用文献は次のとおり．

Adamietz, J., Zum plautinischen Pseudolus. *WüJbb* N.F. 5(1979), 105-16.

Anderson, W. S., *Barbarian Play: Plautus' Roman Comedy*. Toronto/Buffaloe/London 1993.

Arnott, W. G., Calidorus' Surprise: A Scene of Plautus' Pseudolus, with an Appendix on Ballio's Birthday. *WSt* 16(1982), 131-48.

Fuchs, H., Nachlese im Pseudolus. *Philologus* 89(1934), 258-60.

Duckworth, G. E., *The Nature of Roman Comedy*. Princeton 1952.

Ernout, E., *Palute*. Tom. VI. Paris 1957.

Fraenkel, E., *Plautinisches im Plautus*. Berlin 1922.

Gaiser, K., Zur Eigenart der römischen Komödie: Plautus und Terenz gegenüber ihren griechischen Vorbilden. *ANRW* I 2(1972), 1027-1113, esp. 1081f.

Görler, W., Plautinisches im Pseudolus. *WüJbb* N.F. 9(1983), 89-105.

Jachmann, G., Zum Pseudolus des Plautus. *Philologus* 88(1933), 443-56.

Klingner, F., Über zwei Szenen des plautinischen Pseudolus. *Hermes* 64(1929), 110-39.

Lefèvre, Plautus-Studien I: Der doppelte Geldkreislauf im Pseudolus. *Hermes* 105(1977), 441-54.

Leo(1896), F., *Plauti Comoediae* II. Berlin 1958[2].

Id.(1903), Über den Pseudolus des Plautus. *Nachrichten von der Königl. Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen. Phil.-hist. Kl.* 1903, 347-54.

Lindsay, W. M., *Plauti Comoediae* II. Oxford 1905.

Mantero, T., Lo *Pseudolus* plautino e i framenti dello Ψευδόμενος di Alessi. *Maia* 18(1966), 392-409.

Önnerfors, A., Ein paar Probleme im plautinischen >>Pseudolus>>. *Eranos* 56(1958), 21-40.

Ritschel, F., *T. Macci Plauti Comoediae* Tom. III. Fasc. IV. Leipzig 1887.

Slater, N. W., *Plautus in Performance*. Princeton 1985, 118-46.

Theiler, W., Zum Gefüge einiger plautinischer Komödien. In *Untersuchungen zur antiken Literatur*. Berlin 1970, 363-93(orig. *Hermes* 73(1938), 269-96).

Williams, G., Some Problems in the Construction of Plautus' Pseudolus. *Hermes* 84(1956), 424-55.

Willcock, M. M., *Plautus: Pseudolus*. Bristol 1987.

Wright, J., The Transformations of Pseudolus. *TAPA* 105(1975), 403-16.

Zäh, H., Zwei Probleme in der letzten Szene des plautinischen Pseudolus. *WüJbb* N.F. 10 (1984), 67-72.

Zwierlein, O., *Zur Kritik und Exegesedes Plautus III: Pseudolus*. Stuttgart 1991

(1) Williams(1956), 444; cf. Gaiser, 1082, Lefèvre, 446f. (Hough, J. N., The Composition of the Pseudolus of Plautus. Lancaster 1931, 68 は未見).

(2) Lefèvre, 443-52.

(3) Görler, 96f.

(4) これまでの議論は大別して三つ．一つは，ギリシアの原作に対するプラウトゥスの改変の結果として残った不整合とするもので，すでに見たような第五幕に改変を想定する立場（注(1)参照; also cf. Arnott, 146ff.）と，第一幕のカリポがこの場面だけの追加とする立場(Duckworth, 179, Onnefors, 38f.; cf. Leo(1903), 348)がある．いま一つは，は，プセウドルスがカリドルスに助っ人を呼ぶように頼んだときに具体策をもっていなかったのと同じく，プセウドルスの臨機応変の機略を描くことへの寄与，という点に説明を求める(Fuchs, 258f., Willcock, 16)．三つ目は，カリポは観客の代表と考える見方(Theiler, 369)で，本稿はここに考察の手がかりを求めたい．とくに，560行以降にカリポが観客席に着いた，というゲルラーの示唆(Görler, 98, Anm. 29)は有力と思われ，後に論及する(41頁).

(5) Cf. Önnefors, 34-38, Gaiser, 1082, Adamietz, 112f., Görler, 96f., Zäh, 70ff., Zwierlein, 17ff.

(6) Zäh, 72.

(7) ツヴィアラインの最近の研究は，後代の改作者の挿入として削除すべき，と断じた(Zwierlein, loc. cit.).

(8) Wright, esp., 410ff., Slater, 118-46.

(9) Slater, 143-5.

(10) Cf. Ibid., 126f.

(11) Cf. Ibid., 130f.

(12) Cf. also 522-3: PS. vin etiam dicam quod vos magi' miremini? CALL. studeo hercle audire, nam ted ausculto lubens.

(13) 第四幕でバリオがシモに20ミナの保証とポエニキウムを贈り物にすることを約束するのは明らかにこのモチーフによっている．また，この約束でも，シモは「危ないことはなさそう」(1076)と言ったあとで，なお，慎重に事の次第を確かめている(1078-98)．後述，26頁参照.

(14) 策略を仕掛ける相手に「用心しろ」と促すモチーフは『バッキス姉妹』739行以下にも見られる．ただ，そこでは，奴隷のクリュサルスは自分を警戒させるのと裏腹に，若者ムネシロクスの手紙に書かれた言葉を信用させて大旦那ニコブルスを策略にかける意図がはっきりしている.

(15) Fraenkel, 231-50; Gaiser, 1079-82; Andeson, 88-106. Cf. also Duckworth, 249-53.

(16) 上に指摘した他に，プセウドルスは第二幕冒頭で自分の用意した「二重，三重の策略と詐術」(580)に言及し，同第四場ではカリドルスにハルパクスから手に入れた手紙を見せるのに「これはこれは，あなた様，王様よ，プセウドルスに命令を下す

あなたをこそ私はさがしております．三度，三重，三倍，三様にして三つの喜び，三つの術が勝ち取った三つの満悦を差し上げねばならぬからです．それは三人の者への詐術から生み出されます．悪意と策略とペテンを用いるのです．この封印をした書面に入れて，あなたに届けに参りました．いささか小さな書面ではありますが」(703-6)と悲劇の使者を模している(cf. ut paratragoedat 707)が，これらの「三重」のモチーフが第四幕第三場では「恐れ」について用いられている点も対比と見られる．

(17) Wright, esp., 409-13.

(18) 他に，「料理」については第三幕の料理人の口舌が関連し(cf. Wright, 404-7; 後述，30頁以下参照)，また，「攻城」に関してはウリクセスのイメージが見られる(1064-5, 1243-4).

(19) Cf. 667ff.

(20) Cf. Wright, 407.

(21) 後述，43頁参照.

(22) Cf. Wright, 404-7.

(23) Cf. Slater, 141f.

(24) Leo(1896), Willcock などに従って，841(item 843) dimissis manibus, 844 dimissis pedibus と読む．dimissis manibus は一目散に走る様についての普通の表現(cf. *Epidic.* 452)だが，ここでは，手がないはずの香りについて用いた点で奇抜．それをさらに「脚」と言い直して奇抜さを増した，と解する．注意すべきは，この言い直しが123行以下のプセウドルスの冗談と類似したパターンを踏んでいることである（後述，43頁参照）．

(25) とくに，バリオとシミアに共通して用いられる magnuficus は俳優の役者ぶりを示す言葉だと，スレイターは指摘している(Slater, 123).

(26) スレイターは，老年のプラウトゥスが舞台に出演できなくなったことの暗示，とうがった推測をしている(Slater, 145f.).

(27) ツェーは，ここでのシモの希望を，高慢な奴隷の鼻をへし折り，主人としての自分の威厳を保つことへの希望，とし，これを金を渡すことにより果たそうとしている，と解している(Zäh, 68ff.)．が，プセウドルスとシモに想定する心の動きが不自然に唐突かつ複雑すぎるように思われる．

(28) 偶然かも知れないが，ガリア人のローマ攻囲に関しては，この第五幕の場面と奇妙に符合する逸話がある．リウィウスによると，ガリア人によるローマ攻囲に先立つ数年前，カミルス率いるローマ軍はウェイイの町を陥落させた．カミルスはその成果が予期していたより大きかったことを知ると，天に向かって，神々と人間たちの

中に自分とローマ国民の幸運が過大だと思う者があっても，その嫉妬を和らげるのに自分個人もローマ国民全体もできるだけ小さな不利益ですむように，と祈った．ところが，祈願のあいだに体を転じたとき誤って倒れてしまった．このことをカミルス自身の追放，および，ローマ占領の予兆と考えるひともあった，という(Liv.5.21.14-6). こちらは，プセウドルスとカミルスの対応ということになるが，いずれも転倒が前兆をなしている．

(29) 1323行を，Leo(1896), Wilcock らに従って，Non; me dices と読む．

(30) 1331行を，Leo(1896), Ernout, Ritschel, Willcock らに従って，PS. i hac. SIMO te sequor. と科白の割り当てをする．後述，41頁参照．

(31) 注(4)参照．